



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 中観哲学に於ける「縁起」の意味：月称、清弁の解釈をめぐって                                                       |
| Author(s)    | 北川, 清仁                                                                              |
| Citation     | 待兼山論叢. 哲学篇. 1978, 11, p. 7-22                                                       |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/11950">https://hdl.handle.net/11094/11950</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 中観哲学に於ける「縁起」の意味

——月称、清弁の解釈をめぐって——

北 川 清 仁

## 序

ここで取り上げるテキストは、主として、『根本中偈 (Mūlamadhyamakakārikā<sup>(1)</sup>)』の帰敬偈と、それに続く所の第一偈 (M. K. I, 1)、及びそれらに対する、月称造『明句と名づける根本中の註 (Prasannapadā nāma mūlamadhyamakavṛittiḥ<sup>(2)</sup>)』と、清弁造『般若燈、根本中の註 (Prājñāpradīpa-mūlamadhyamakavṛitti<sup>(3)</sup>)』の註釈である。

『根本中偈』は、二十七章から成り、ここで取り上げるのは、その内第一章「縁の考察」の第一偈と、帰敬偈のみの、わずかな部分にすぎないが、願いは、すべての『根本中偈』の研究者が目ざしているであろう、その全体像の把握である。その遠い道のりの第一歩の意味で書いたものが、この論文である。

## 1. 『根本中偈』に於ける帰敬偈と第一偈の位置

### (1) 帰敬偈について

『根本中偈』冒頭の偈 (『明句論』引用の skt. に依る) ——

anirodhamanutpādamanucchedamaśāśvatam/

anekārthamananārthamanāgamamanirgamam //

yaḥ pratītyasamutpādaṁ prapañcopaśamaṁ śivam/

deśayāmāsa sambuddhastam vande vadatām varam //

不滅、不生、不断、不常、不一義、不異義、不来、不去にして、戲論が寂滅し吉祥なる縁起を説かれた正覚者、諸説法者中の最勝者に、私は稽首礼す。

これは正覚者に帰敬を表する偈であるとともに、『順中論』に、「如是論偈。是論根本。盡撰彼論」と述べられているように、<sup>(4)</sup> 『根本中偈』の要と為す偈である。『明句論』に於て、月称は、「その不滅等の八つの修飾語によって限定された縁起は、論の所詮の義である」と、亦、「一切の戲論が寂滅し吉祥の相ある涅槃が、論の目的である」と述べている。<sup>(5)</sup> 帰敬偈の『根本中偈』に於ける意味の重さは、縁起が<sup>(6)</sup>不滅等にして、戲論が寂滅し吉祥なるものとして、そこに表明されているということによる。

清弁は、論の相属 (hbrel-pa) を述べた文章の中に於て「(世尊は) 最上の乗によって、諸の世間に縁起という最上の宝を生じ、年・種姓・所・時をえらぶことなく、すべての外道・声聞・独覚とは不共なる、世俗・勝義諦に依って、生・不生等の言詮によって教説を説かれた<sup>(7)</sup>」と述べ、龍樹論師にあっても、如来の理趣を不生等のことばによって誤りなく解説するとして、『根本中偈』が縁起の教説を展開するものであることを示唆している。

この帰敬偈中の、不滅等の所謂、八不は、『無畏註』によれば、「勝義諦に入った者が、滅等の語に対する執着を退ける為」といわれているように、破邪を目的として、不滅等と説かれているのであるが、この八不は、戲論寂滅した縁起を修飾するものであり、正覚者が説かれたのは縁起であるが、羅什訳、<sup>(8)</sup>

不生亦不滅　不常亦不断　不一亦不異　不来亦不出

能説是因縁　善滅諸戲論　我稽首禮佛　諸説中第一

に依った嘉祥大師は、「八不は蓋し是れ諸佛の中心衆聖の行處なり」。「能説是因縁とは正しく二智中道を説く。能説は是佛智なり。能く因縁の八不の正教を説くなり」。「諸説中第一とは八不は顯了究竟の説なるが故に八不に

は収束皆盡く諸佛は此一致に同じ故に第一と言う」と述べ<sup>(9)</sup>、八不の方を主にする解釈をしている。このような解釈は skt. に照らし合わせて見る限り正確な偈の解釈とはいえないが、『根本中偈』全体の傾向は破邪であるから偈のひとつの理解の仕方を示すものである。

これに対して skt. を忠実に訳すチベット語訳によると、次のように、八不と縁起の関係が正しく訳出されている。

gan-gis rten-cin ḥbel-par ḥbyun/

ḥgag-pa med-pa skye-med-pa/

chad-pa med-pa rtag-med-pa/

ḥon-ba med-pa ḥgro-med-pa/

tha-dad don-min don-cig-min/

spros-pa ṅer-shi shi-bstan-pa/

rdsogs-paḥi saṅs-rgyas smra-rnams-kyi/

dam-pa-de-la phyag-ḥtshal-lo/(般若燈論)<sup>(10)</sup>

縁起は、滅なく、生なく、断なく、常なく、来なく、去なく、異義でなく、一義でなく<sup>(11)</sup>、戲論が寂滅し吉祥<sup>(12)</sup>であると説かれた、諸説法者中の最勝者なる正覚者に稽首礼する。

滅より去に至る八支の説明は、月称に依れば次の通りである。

滅とは滅すること (niruddhi) で、滅は刹那滅のことであるといわれる。

生とは生ずること (utpādana) で、自体として現われることである。

断とはたちきること、相續をたちきることの意味である。常とは常住 (nitya) のことで、一切時に持続するという意味である。これは一

であり義であるということが一義であり、不離なる義、種々でないという意味である。異義とは分離せる義で、種々であるという意味である。

来とは来ること (āgati) で、遠くの地にあるものが近く of 地に来ることである。去とは去ること (nirgati) で、近く of 地にあるものが

遠くの地に去ることである<sup>(13)</sup>。

清弁は生・滅について literal な註釈を施しているにすぎない外は、月称と同趣旨の説明をしている<sup>(14)</sup>。月称に依れば偈に滅の遮止が先にあるのは生と滅とは前後の分位が定まっていないことを明らかにする為であると、亦、不滅等の八支のみが縁起を限定しているのはそれらが主として論議を構成しているからであると述べている。滅等に対する論破は、生は第一章、常は第十六章第一偈前句、断は第十七章第六偈後句、第二十一章第十六偈、一異は第十章、来去は第二章に於て為されているが<sup>(15)</sup>、このように滅等が論破せられる所に説かれる八不が、総じて何を顕わしているかと言えば、縁起と即一なる空性である。青目の註釈に次のようにいう。

以大乘法説因縁相。所謂一切法不生不滅不一不異等。畢竟空無所有。<sup>(16)</sup>

無着の『順中論』によると<sup>(17)</sup>、『根本中偈』は全く『般若経』に基く、といわれるが、空性を顕す八不が、縁起にかかっているこの帰敬偈は、龍樹の『根本中偈』の歴史的な意味をものがたっている。すなわち仏教の基本的思惟方法を示すものとしての縁起説によって、『般若経』に説かれている空を根拠づけたのである。

原始經典に、

比丘らよ、何が縁起であるか。比丘らよ、もろもろの如来が世に出て、も出なくとも、生によって老死がある、という、この道理は定まったものであり、法として決定しているものである。(すなわち、この道理は)此縁性ということである。これを如来はよくさとり、よく達する<sup>(18)</sup>。

と、述べられているように、縁起の道理は、如来の出世不出世にかかわらない真理(法)であるとされ、

これあるにより、かれあり、これ生ずれば、かれ生ず。これなければ、かれなく、これ滅すれば、かれ滅す (imasmim̐ sati idam̐ hoti,

imass uppādā idaṃ uppajjati, imasmim asati idaṃ na hoti, imassa  
nirodha idaṃ nirujjhati)

の句によって表わされ、簡単に、此縁性 (idappaccayatā, idaṃpratyāyatā) ともいわれ、老死の問題にこの道理が適用された代表的な例が、十二因縁説である。龍樹は、この相依の原理を徹底せしめ、相依なるが故に、無自性、空と説く。「聖諦の考察」(第二十四章)、第十八、十九偈に、

縁起なるもの、それを我々は空性と説く。それ (śūnyatā) は相待の仮説であり、それが中道である。

yaḥ pratīyasamutpādaḥ sunyatāṃ taṃ pracakṣmahe/  
sa prajñaptirupādāya pratipatsaiva madhyamā<sup>(19)</sup> //

いかなる法も縁起したものでないものは認められない。それ故、いかなる不空なる法も認められない。

apratīya samutpanno dharmāḥ kaścinna vidyate/  
yasmattasmādasūnyo'hi dharmāḥ kaścinna vidyate<sup>(20)</sup> //

これらの偈によって、縁起した法は空であること、亦、縁起と空性の即一なることが説かれている。根拠づける関係は、縁起⇒空性であって、その逆ではない。それは、『般若経』の思想家たちの神秘的直観(梶山雄一氏<sup>(21)</sup>)が、縁起と即一なることに於て、能く darśana として、動き、展開するということを意味していると思われる。

## (2)第一偈について

「帰敬偈」の次に説かれている偈 (M. K. 1—1) は、四不生偈と呼ばれる偈で、不生を説く偈である。

na svato nāpi parato na dvābhyām napyahetutaḥ/  
utpannā jātu vidyante bhāvāḥ kvacana ke cana // (『明句論』に依る。)

諸の存在は、いかなるものでも、何処に於ても、決して、自よりも、

他よりも、共よりも、無因よりも、生じたものとは認められない。

諸法不自生 亦不從他生 不共不無因 是故知無生（羅什訳）

この偈は羅什によって、適切に訳されているように、不生（羅什訳、無生）の根拠を述べたもので、もし、諸の存在が、生じたもの（utpanna）と認められるならば、その因は、自・他・共・無因に摂することが出来るが、その各々について考察してゆくこと、いづれからも生ずること（utpāda）が不可能であるから、諸の存在は生じたものとは認められない、ということとを、結論的に述べたものである。

この偈と帰敬偈との関係について月称は、次のように述べている。

今、不滅等によって限定された縁起を論議しようと欲して、生の否定によって滅等の否定が容易になることを思い、論師は最初に、生の否定に着手する<sup>(22)</sup>。

清弁も同様に、

不生を説くことによって、不滅等の修飾語が容易に説かれるから。<sup>(23)</sup>と、述べている。これらによって、第一偈の生の否定は、帰敬偈にある不生（anutpāda）にかかわるものである、ということが分るのであるが、これに依ってのみでは、帰敬偈と第一偈との内面的な関連がよくうかがえない。青目註によれば、八不に於て、不生不滅以外の六事を説くのは不生不滅の義を成ずる為であり、不滅は生なければ滅もない故に不生の義を明らかにすることによって、自ずと、成立するとし、八不の内でも、不生の論立に重きを置いている。亦、月称は、四不生の理を明らかにした後で、次のように述べている。

以上かくの如く、生なし、ということが論立された。そして生があり得ない故に、縁起は不生等によって限定されたものとして成立する<sup>(24)</sup>。

四不生偈が縁起にかかわるのは、不自生等の四句は阿含以来、縁起の

否定的方面を顕しており、『十二門論』に、

復次一切法空。何以故。自作他作。共作無因作。不可得故。如説

自作及他作 共作無因作 如是不可得 是則無有苦<sup>(25)</sup>。

とあり、自より等の生は自作等と同意味と解されるから、四不生は空を明かしたものであると見られ、従って、縁起に対して八不と同じ関係におかれているのである。

## 2. 帰敬偈の解釈を中心とした、月称、清弁の縁起説

### (1) 「縁起」の解釈をめぐる

月称、清弁は、それぞれ、「縁起」の語義解釈の面から、「縁起」を定義し、自説を定義し他説を非難している。

月称は、縁起 *pratīyasamutpāda* という複合語 (*samāsa*) を、*prati* (*upasarga*; prefix) —*eti* (*kriyā-pāda*; verb) —*ya* (*kriya*; gerund) —*samut* (*upasarga*; prefix) —*pāda* <√*pad* と、分解し、*prati*=*prāpti* (至る)、*eti*=*gati* (行くこと) と釈し、接頭辞によって語根 (*dhātu*) の意味が変化するから、*pratīya* とは、*prāpta-apekṣā* (待たれたものに至ったこと) の意味であり、*samut* が前につく√*pad* は、現れ出ること (*prādūrbhāva*) の意味であるとし、縁起を定義して、

諸の存在が、因と縁に因待して生ずること (*hetupratyayāpekso bhāvānām utpādah*) という<sup>(26)</sup>。又、『明句論』の他の箇所では、「相互因待 (*parasparāpekṣā*)」といいかえている。

これに対して、清弁の方は、仏護が *pratīya* ということばの *prati* とは種々の意味であり、*eti* は至るの意味であり、*samutpāda* は生起 (*sambhava*) の意味があるから、「あれこれに縁って、至って生ずること」が縁起の意味であると解釈する所を非難して、例えば、「眼と諸の色とに縁って眼識が生ずる (*cakṣuḥ pratīya rūpāṇi cotpadyate cakṣur-*

vijñānam)」という如き、そこに、「至る」ということが可能になる為の二つの対象がない場合にも、pratitya ということばが使われるのであるから、pratitya は「至る」という意味があるとは考えられず、従って仏護の解釈は不適であるとし、

これあるにより、かれあり、これ生ずれば、かれ生ず、という此縁性の意味が縁起の意味である (asmin sati idam bhavati, asyotpādad idamutpadyata iti idampratyayatarthah pratīyasamutpādārthah)<sup>(27)</sup>。

と、述べている。

月称、清弁の、「縁起」に対する解釈の分れ目は、pratitya が、「至る」の意味を有しているか否か、にある。月称は、清弁の縁起に対する解釈を、縁起ということばは慣用的意味を有することばとしては認められず、ことばを構成する部分の意味に合うものであるとし、斥けている。月称は、「至って (prapya)」と、「因待して (apeksya)」とは同義語であるとしているから<sup>(28)</sup>、月称の非難は、清弁が縁起ということばから、因待 (apeksa) という意味を引出していない、という所に基いている。

pratitya の解釈をめぐる両者の対立は、縁起を相互因待という論理に徹底せしめようとする月称と、縁起の語義解釈に即しては、起の意味を認め、そこに相異なるが故に、無自性、空と論理の徹底化を行わず、此縁性という解釈にとどめおいて、そこに、世俗と勝義の二つの観点を可能ならしめようとする清弁の立場の相違に帰するのである。

清弁は次のような反論を設定している。

もし、縁起が前述のように不生であるとするならば、不生であれば縁起ということばは不合理であり、自己のことばと矛盾し、宗の過失になる。それ故、その意味に過難が生ずる。例えば、一切のことばは虚妄である、という如し。

そして、次のように答えている。

もし、一切の縁起が不生であると主張するならば、そこに過失が起るであろう。ということは、一切ということばによって世俗の縁起を（不生であると）認めることが考慮されているからであり、亦（不生と限定される）勝義なる縁起があると認めるものであるから、そこに過難される点はなく、それ故に、（反論者の）因の意味は成り立たない。例えば、布施等の如く、勝義としては清浄ではないが、輪廻を考慮する故に、諸の清浄なることといい、あるいは、識は我なりと認められるが、勝義としては識は我でないという如し<sup>(29)</sup>。

これらによって明らかなように、清弁は、世俗と勝義の二つの観点から縁起を解釈し、「勝義としては」縁起は不生であるとする。清弁は、論のはじめに、「（世尊は）世俗・勝義諦に依って、生・不生等の言詮によって（縁起の）教説を説かれた」と述べている。

それでは、一体、縁起を相互因待という論理に徹底せしめる月称は、縁起を如何なる意味に於て不生と為すのか？ 亦、清弁にあっては、此縁起を意味する縁起が、何故、勝義としては不生とされるのか？

月称は、縁起に対する註釈の結びとして次のように述べている。

諸の存在は、因と縁に因待して生ずると、世尊によって教示せられたので、諸の存在が、無因・一因・不平等因から生ずることと、自・他・共によって作られたものであるとの（見解は）否定せられた。亦、その否定から、世俗の事物の上にあるままの世俗の自相が存在せしめられている。今、世俗としては、かの縁起は自性として不生であるから、聖智の観点からは、滅はそこにはない。縁起には滅等がない、そのままに、（龍樹論師は）論書全体を通じて説示しようとされているのである<sup>(30)</sup>。

亦、『六十頌如理論』の「縁りて生ずるものは不生なりと真実を知る最勝者によって説かれた」という偈に対する月称の註釈を掲げると（長尾雅人

氏の訳)、

縁起 (pratītya-samutpāda) を見る時、諸法の自性は不可得である。何となれば、縁りて生ずる (pratītya-ja) 程のものは影像と同じく自性として不生 (svabhāvena-anutpanna) であるからである。若し「縁生ずるものは実に〔縁性といふ〕生なのではないか。何故にそれが不生といふ言葉によって説かれることとなるか。また逆に不生〔が真実〕なりとすれば、縁りて生ずるとは説かれるべきではない。それ故、互に性質が矛盾してゐるものであるから、此は理に合しないといふならば、あゝ、如何に耳なく心なきものによって論駁せられたことよ。此は我々にとって如何にも難点なのでもあろう。〔汝にはさうも思へようが然し〕我々が、縁りて生ぜるものは影像と同じく自性として不生であると云ふ時、論難せらるべき餘地は果して何處にあるのであらうか<sup>(31)</sup>。

即ち、月称は、「自性として不生」を不生の意味と為し、それを縁起に即して説くのである。縁りて生ずる、即ち、因と縁に因待して生ずる諸の存在は、自性として不生 (svabhāvena-anutpanna) であるから、生じたものは影像の如きものであって、そこに何ら自体として成立したものは無い。

月称は、亦、世俗・言説としても生を否定する。『入中論』に次のように述べている<sup>(32)</sup>。

真実 (を伺察する) 場合、ある道理を以って、自と他よりの生起は道理でない時、その同じ道理によって言説としても、(生起の) 道理はなく、汝がいう生起は如何なる (道理に) よっているのか。

月称が「縁起」から因待という意味を引出し、論理性に徹底せしめるのは、世俗・言説としても、生起を否定しようと意図するものである。何故なら、上記の『入中論』の偈の「ある道理を以って、自と他よりの生起は道理でない」ことは、縁りて生ずるということによって自より等の生起が否定せられることである。このことは、『入中論』に<sup>(33)</sup>、

存在は縁りて生ずる故に、それら（無因生等の四辺や常等の）諸分別は観察され得る所でない。それ故、この縁起の道理によって、悪見の網をすべて断ずるのである。

と、述べている所によって明らかであるが、「その同じ道理によって言説としても」といわれるのは、縁起をその縁りて＝相互因待という論理に徹底せしめることによって可能になるからである。

清弁の場合はどうか？ 註釈の中で、八不は声聞と不共であるとは認められないとする自部の者の反論に対して、清弁は、「生は不生を自性（*ño-bo-ñid*）とすると説くから」難は当たらない、と述べているが<sup>(34)</sup>、これはどういう意味なのか？ これについて、前に引用した、不生であれば、縁起ということは矛盾である云々の論難に対する回答の続きに次のような喩例があげられているのが注目せられる。

例えば、幻の男が生ずる場合、男の自性としては不生である如し。幻、焰の如き内入の自体（*bdag-ñid*）が生ずる（と為すのも）世俗としてであって、勝義として認めるものではない故、過失はない<sup>(35)</sup>。

不生を自性とする生は、幻の如く生ずるあり方であって、自性としては不生である、ということの意味するものではないか。このことを明らかにさせる為に、『大乘掌珍論』の有為空を証明する推論式とその註釈<sup>(36)</sup>を次に掲げる。

真性有為空 〔宗〕

如幻 〔喩〕

縁生故。〔因〕

此中間同許有者。自亦許為世俗有故。世俗現量生起因縁亦許有故。眼等有為世俗諦攝。牧牛人等皆共了知。眼等有為是實有故。勿違如是自宗所許。現量共知。故以真性簡別立宗。真義自体説名真性。即勝義諦。就勝義諦立有為空。非就世俗……空與無性虚妄顯現門之差別。是名立宗。衆縁所起男女羊鹿

諸幻事等。自性実無顕現似有。……所立有法皆從縁生。為立此因説縁生故。因等衆縁共所生故。説名縁生。即縁所起縁所現義。……云何此中建立比量。

謂、

就真性眼処性空。〔宗〕

衆縁生故。〔因〕

諸縁生者。皆就真性其自性空。牧牛女等尚所共了。如有威神咒術藥力。加彼草木塊博等物。衆縁所現男女象馬宮殿園林水火等相。誑惑愚夫種種幻事。〔喻〕……〔世尊〕又作是言。諸縁生者皆是無生。由彼都無生自性故。若説縁生即説空性。知空性者即無放逸。

清弁は、世間が有りとするものは、自らも、亦、世俗有として許し、有為空は、勝義諦についてのみの主張であると述べている。勝義としては、有為法は、幻の如く、「自性実無顕現似有」というあり方において存在している。何とならば、有為法は縁生なる故である。縁生とは、「因等衆縁共所生」と説明されている。清弁は縁生を根拠にして、自性としては不生である、これが、縁起不生の意味であるとするもののように思われる。不生を自性とする生は縁生を指す。

## (2) 「戲論の寂滅」をめぐって

ここでとりあげるのは、帰敬偈中の、「戲論が寂滅し吉祥なる」に対する、月称と清弁の解釈である。

月称は次のように述べている。

諸聖がありのままに縁起を見るとき、所詮等の相ある戲論は全く寂滅する故に、ここに諸の戲論の寂滅あり、といい、その縁起こそが戲論の寂滅といわれるのである。亦、そこでは、心、心所は止息し、能知、所知、言説は滅し、生老死等に対する怖れが完全に捨離せられるから、吉祥である<sup>(37)</sup>。

清弁は、

戯論が寂滅し、とは、ことばの自性に対する執着が寂滅する故に。吉祥である、とは、一切の災障から離れる故に。或は自性として空である故に<sup>(38)</sup>。

月称が語ろうとしているのは、諸法実相であることは、『根本中偈』、第十八章「私の考察」第七偈に、

心境の止息するとき、語られるものは止息す。法性（羅什訳、諸法実相）は涅槃の如く不生不滅である。

とあることによって明らかである。亦、同、第九偈に、

他に縁ることなく寂静であり戯論によって戯論されず、分別を離れ、不異義である。それが真実の相（*tattvasya lakṣaṇam*）である。

とあるのも参照される。

戯論が寂滅している、とは、言葉でいい表わされるものが滅していることで、そこでは能知・所知・言説が止息している、といわれているから、それは我々のことばも思惟も及ばない、それ故、我々の世俗・言説の世界からは断絶した世界である。月称はそのことを指して、「諸聖の勝義は、黙然たり（*tūṣṇīm-bhāvaḥ*）」と表現している。

これに対して、清弁の説明は簡略であるが、「戯論が寂滅し」を、「ことばの自性に対する執着が寂滅し」と取っているところを見ると、清弁は、「戯論が寂滅し吉祥なる縁起」を、月称のように言慮を絶した「黙然たる」勝義を意味したものとは解釈していないと思われる。何故なら、ことばの自性に対する執着が寂滅しても、ことばは語られ得るであろうし、ことばの自性は本来、空であるから。ここで、「戯論が寂滅し吉祥なる縁起を説かれた」との表現が注目せられるのである。清弁は勝義諦を分つて、異門勝義（*pariyāyaparamārtha*）無異門勝義（*aparīyāyaparamārtha*）の二諦とし、前者は無分別智と無生等の教説と聞思修の三慧との三を指すとい

う<sup>(39)</sup>。『般若燈論』の序論を依用して説明すれば、般若波羅蜜の理趣、縁起の道理を証悟した無分別智が、不生等なる縁起を説く後得清淨世間智となって、世間に働きかけ、ここに始めて、一切の戲論の寂滅が達成せられてゆくのである。

### 結び

月称と清弁の註釈に依って、主として帰敬偈に説かれている所の縁起をめぐって考察した。縁起をめぐる二人の解釈の相違は、月称が相互因待 (parasparāpekṣā) の論理によって、縁起に即して不生を説くのに対して、清弁は、此縁性という通仏教的解釈を施し、そこに生が是認される観点が可能となる為の余地を残そうとする所に顕われている。このような両者の相違は、世俗・言説を両者が如何に解釈するかの問題にかかわっている。この点は今後の研究によって深めたいと思う。

### 注

- (1) 以下、註記には、M. K. と略記する。
- (2) 以下、本文には、『明句論』と記す。
- (3) 以下、本文には、『般若燈論』と記す。
- (4) 大正新脩大藏經第三十卷（以下、註記では、大正、と略記する）。p.39c.
- (5) L. de La Vallée Poussin, *Mūlamadhyamakakārikās (Madhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti, Bibliotheca Buddhica IV, St. Petersburg, 1903~13.* (以下の註記には、*Prasannapadā* と略記する)。p.3~4.
- (6) 月称は、「生等の教説 (deśanā) には虚妄の義があることを知らしめる為に、論師は縁起の随見 (Pratītyasamutpāda-anudarśana) を企てられたのである」と述べている。*Prasannapadā*, p. 44. 『根本中偈』は即ち、縁起の随見である。
- (7) M. Walleser, *Prajñāpradīpā by Bhāvaviveka*, Calcutta, Asiatic Society, 1914 (以下、註記には、*Prajñāpradīpā* と略記する)。p.2.
- (8) 大正。p.1, b.
- (9) 『大乘玄論』卷二。

- (10) *Prajñāpradīpa*, p. 3.
- (11) 来なく、去なく、異義なく、一義でなく— この順序に従うものは、チベット語訳、『般若燈論』、『無畏註』、『仏護註』。  
不亦不異 不来亦不出一この順序に従うものは、『明句論』、漢訳、『般若燈論』；『順中論』、青目訳『中論』。
- (12) Tib. shi-ba は「寂靜」の意味であるが、*Prasannapadā* のチベット語訳に於ても、śiva を shi-ba と訳しているから、訳語を「吉祥」に統一した。
- (13) *Prasannapadā*, p. 4.
- (14) 月称や清弁の註釈には、帰敬偈に関しては不滅等に対する説明は為されていない。不滅等の八支に対する説明を与えているのは『無畏註』と『青目註』とである。
- (15) 安井広済『中観思想の研究』法蔵館 1970、p.108～151. 参照。
- (16) 大正、p.1 b.
- (17) 大正、p.39 c～40 b.
- (18) *Sāmyutta-Nikāya*, Vol. II, p. 25.
- (19) M. K. XXIV-18, *Prasannapadā*, p. 503.
- (20) M. K. XXIV-19, *Prasannapadā*, p. 505.
- (21) 梶山雄一、上山春平『仏教の思想 3 空の論理〈中観〉』角川書店、昭和 44 年、p.30～34. 参照。
- (22) *Prasannapadā*, p. 12.
- (23) *Prajñāpradīpa*, p. 9.
- (24) *Prasannapadā*, p. 39.
- (25) 大正、p.165 c.
- (26) *Prasannapadā*, p. 5.
- (27) *Prajñāpradīpa*, p. 3～4; *Prasannapadā*, p. 5～10.
- (28) *Prasannapadā*, p. 9.
- (29) *Prajñāpradīpa*, p. 6～7.
- (30) *Prasannapadā*, p. 10～11.
- (31) 長尾雅人『西藏仏教研究』岩波書店、昭和 29 年、p.184.
- (32) 『入中論』第六章第三十六偈(L. de La Vallée Poussin, *Madhyamakāvātāra par Candrakīrti*, *Bibliotheca Buddhica IX*. St. Petersburg, 1907～12, p. 122) ; 小川一乗『空性思想の研究——入中論の解説——』文栄堂、昭和 51 年、p.124; 長尾、前掲書、p.121.
- (33) 『入中論』第六章第百十五偈。Poussin、前掲書、p.228; 小川、前掲書、p.247; 長尾、前掲書、p.181.
- (34) *Prajñāpradīpa*, p. 8～9.

- (35) *ibid.* p. 7.
- (36) 大正. p.268 c。
- (37) *Prasannapadā*, p. 11.
- (38) *Prajñāpradīpa*, p. 6.
- (39) 野澤静證「二諦の無と有と二行の有と無」(山口博士還暦記念『印度学佛教学論叢』1955所収) p.190~191. 参照。

(大学院学生)